

# 東京芸大シンフォニア英国公演

イギリス・ロンドン、ケンブリッジでおこなわれた、芸大音楽学部史上初めての海外派遣。  
戦争のさなかの海外公演で、学生たちは民族や時間を超えた「普遍性」を感じ取ってきた。



## 芸大の素晴らしさを 再認識した旅

佐藤卓史

芸大音楽学部の歴史上、初の海外派遣となるはずだった「芸大シンフォニア英国公演」が、アフガン空爆開始により成田空港で突然の中止に追い込まれてから一年半。今度はイラク戦争勃発でまたしても催行が危ぶまれたが、結局予定通り出発することになり、われわれは戦争の真つ只中をイギリスへと飛び立った。三月二十二日から四月一日までの十一日間、計四回のオーケストラ演奏会を催す大規模なツアーとなった。

自らヴァイオリンを弾き、素晴らしい超絶技巧を聴かせた魅力たっぷりのマエストロ、ドミトリ・シトコヴェツキー。可憐なハイデイとパワフルなデイヴ、ふたりのトランペッターとの共演を楽しんだシヨスタコーヴィチのピアノ協奏曲、アンコールのバッハ「ストコフスキー」「前奏曲口短調」に聴こえた戦争犠牲者への追悼と平和への祈り。マンチェスターでの、現地の学生との合同オーケストラによるブラームスの第二交響曲、アンコールで演奏された叙情的なエルガーと大和魂全開の外山雄三。そして私たちを歓迎してくださった音楽院や大学の関係者の皆さん。たくさんの場面が蘇るこの演奏旅行で、最も感動的なシーンをひとつあげるとすれば、大英博物館の総石造りの展示室、驚くべき残響の長さという非日常的な音響空間の中、異様に遅いテンポで演奏されたベートーヴェンの第一交響曲であろう。ギリシア時代の巨大な石像



### 東京芸大シンフォニア 英国公演

2003年3月25日(火) ロンドン、英  
国王立音楽院デュークスホール / 3月  
26日(水) ロンドン、大英博物館ネ  
レイド・ルーム(ギリシャ・ローマ  
展示室) / 3月27日(木) ケンブリッ  
ジ、ウエストロードコンサートホー  
ル / 3月30日(日) マンチェスター、  
王立音楽院ブラウン・シプリー・ホ  
ール(英国北王立音楽院シンフォニ  
ー・オーケストラと合同演奏)  
帰国演奏会 - 4月10日(木) 東京上野、  
東京芸術大学音楽堂(写真上)

英国公演では4回にわたる演奏会で、ショ  
スタコーヴィッチのピアノ協奏曲第1番、  
ベートーヴェンの交響曲第1番、ブラームス  
の交響曲第2番、バルトークのディヴェル  
ティメント、ストラヴィンスキーの管弦楽  
のための交響曲などが演奏された



「ネレイド・モニュメント」をバックに、奏で  
られたのは十八世紀ドイツの音楽。そしてそ  
れに息を吹き込んだのはロシア出身の指揮者  
率いる日本の学生オーケストラ。そこには民  
族や時間を超越した、宇宙的な広がりさえ感  
じさせる普遍的な「何か」がたしかに存在し  
ていた。

聴衆の温かく、時に熱狂的な拍手と歓声は  
東京芸大の水準の国際的高さを証明しただけ  
でなく、ヨーロッパの伝統が息づくイギリス  
の人々に、真の感動をもたらしたことを示し  
ている。改めて芸大の素晴らしさを実感する  
とともに、その記念すべき第一回公演にソリ  
ストとして参加することができたことを大き  
な誇りに思っている。

今回の公演実現にあたりご尽力くださった  
皆さまには、本当に感謝の気持ちで堪えない。  
この場を借りてお礼申し上げます。

「ちょっといい話」メンバーの中にはこの春卒  
業生となる学生も多かった。卒業式に出席で  
きない彼らのために、王立音楽学院(RAM)  
の公演終了後のパーティ席上で「仮卒業証書  
授与式」がおこなわれ、卒業生ひとりひと  
りに、RAMの修了証書用紙に実行委員の先生  
方のサインが入った「仮卒業証書」が手渡さ  
れた。前日の夜の提案から一昼夜のうちに密  
かに準備が進められ、実現をみた先生方の粋  
な計らいである。緊張の多い演奏旅行のなか  
で、心温まるエピソードのひとつであった。  
卒業された皆さん、本当におめでとうござい  
ました。

(さとう・たかし/音楽学部ピアノ科一年)